



社会情報研究資料センターニュース

第23号 (2013.3月)

目次	「坪井誠太郎資料」の意義—同資料の概要調査から得られた知見—	梶内文彦	1
	坪井信道・信良関係資料および小野秀雄関係資料目録補遺	玉井建也	7
	新聞縮刷版・製本原紙の黴拭き取り作業報告	飯野洋一	12
	センター情報		15



閲覧室 (Collection Room)

「坪井誠太郎資料」の意義 —同資料の概要調査から得られた知見—

柄内文彦

1. はじめに

今日、科学や技術の営みそのものについて研究することには、高度科学技術社会を支える基盤の健全性を評価するという、極めて実践的に重要な意味がある。中でも、近現代科学史研究の果たす役割は特に大きい。社会が科学技術への依存を強めていく歴史的プロセスをまさに検討することに他ならないからである。しかしながら、それを十分に行うためには近現代科学史資料の収集・調査が必須であるが、それには「まだ歴史になりきっていない」が故の独特の困難がある。

筆者はこれまで、1920年代以降の日本地質学に物理的・化学的研究手法が導入される過程について、代表的な研究者数名と彼らに関わる組織（大学、学部、学協会）に焦点を当てて、調査・研究を行ってきた。これらに関する資料の収集・調査を実施した際に直面したのが、上述の困難だった。近現代だから量的には膨大な資料が存在する。しかし、当然ながらそれらの資料は体系化がなされていない。そのため（少なくとも筆者の場合は）、人から人へ芋づる式に（半ば運任せに）資料を探さねばならなかったり、資料の重要さの見極めに困難を覚えたりした。幸い、研究初期に鍵となる地質学者に出会ったことで、彼を起点に必要な資料を入手できたが、それが運悪く「外れ」だったならば、研究を進めることは難しかっただろう。

坪井誠太郎（1893 - 1986。図1）は、1920年代から1950年代にかけて、東京（帝国）大学地質学教室教授と

して日本地質学界に大きな影響を与えた地質学者（狭義には岩石学者）であり、筆者の主要な研究対象の一人である。社会情報研究資料センター（以下、「センター」）には、坪井誠太郎に関する資料（以下、「誠太郎資料」）が体系的かつ大量に収集・保管されている。これは、同センターによる坪井正五郎資料の収集とアーカイブ構築の際に、併せて収集されたものである¹。筆者は2010年中ごろより、機会を得て、この誠太郎資料の調査に携わっている²。

本稿では、筆者がこれまでに行ってきた誠太郎資料の調査（概要調査）から得られた知見の紹介を通して、同資料の持つ意義について意見を述べてみたい³。



図1 坪井誠太郎（77歳頃）

（出典：S. Tsuboi, et al.: *Professor Seitaro Tsuboi in Petrology and Allied Fields — A Sketch of His Scientific Work —*, 1970）

¹ 坪井正五郎（1863-1913）は、明治時代の人類学者。誠太郎は正五郎の息子。誠太郎自宅には正五郎、誠太郎らの資料が保管されていた。2004年、これらの資料が東大に移管され、2012年より、誠太郎に関する資料を除き「社会情報研究資料センター Digital Cultural Heritage」に収められ公開されている（urlは<<http://crarc.iii.u-tokyo.ac.jp/web/>>）。冊子体の目録『坪井家関連資料目録』（東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター編、2012）も刊行されている。

² 2012年4月以降の研究はJSPS科研費（課題番号24650583）の助成を受けて行われる。

2. 坪井誠太郎と日本地質学界⁴

2.1 坪井誠太郎が日本地質学界で果たした役割

誠太郎の日本地質学界への直接の貢献は、実験岩石学の分野において、N. L. Bowen (1887-1956. アメリカの岩石学者) の火成岩成因論を、自らが開発した光学分析法を組み合わせて導入したことである。

火成岩（玄武岩など）とは地球内部に由来する高温のマグマが冷え固まって形成された岩石のことで、火成岩成因論は、それらマグマの性質やマグマから火成岩が形成される経路などの諸問題を考察する。近代岩石学において Bowen の理論は非常に重要であり、今日では新たな知見を踏まえ根本から大きく修正されているはいえ、Bowen による研究を抜きにして近代岩石学の理論的發展を語ることはできない。

1910 年代、Bowen らが進めていた実験岩石学は、物理的・化学的手法を取り入れた、当時その分野に進もうとする人々にとって、非常に魅力的なものだった⁵。日本では、1910 年代初頭から、東北帝大地質学教室の神津俣祐 (1880-1955. 東北帝大在職は 1912-42) らが鉱物の物理学・化学的実験を精力的に行っていて、しかも、その内容を当時の一般向け科学雑誌で紹介していた⁶。それを読んでいた誠太郎はその「新しい岩石学」に魅かれ、1914 年、東京帝大に入学したのだった⁷。同大地質学教室を当時率いていた小藤文次郎 (1856-1935. 東京帝大在職は 1884-

1923) は、卒業研究として学生たちに顕微鏡を用いた岩石調査を徹底的に行わせており、誠太郎はその知識を深めることができた。これをきっかけとして、誠太郎は生涯を通じて顕微鏡を用いた岩石研究に興味を持ち続けることとなる。こうして、物理学・化学的手法を用いた火成岩成因論と顕微鏡を用いた光学分析という誠太郎の岩石学研究の二本の柱が確立された。その後、1917 年、東京帝大を卒業した誠太郎は、小藤の下で助手・助教授として地質学教室にとどまり、2 年あまりの欧米留学を経て⁸、1923 年に小藤を継いで地質学教室を率いることとなる。

誠太郎の火成岩成因研究は、単なる Bowen 理論の導入ではない。独創的なのは、その理論に偏光顕微鏡を用いた光学分析法を組み合わせたことであり、それは、彼の研究哲学に根差している。誠太郎によると、Bowen の理論により、火成岩に関する多くの事実を統一的に説明できるようになり、火成岩成因に関する理論的体系が整えられるようになった。彼によると、こうした体系は一つの基礎仮定と、その過程と各事実を結びつける「論理の糸」とからなっている。そうした体系が複数あるならば、どれを選んでも良い⁹。しかし、実際には Bowen の理論体系と競える体系はまだないので、先ずすべきことは Bowen の理論体系が妥当かどうか、つまり火成岩についての各事実を統一的に説明できるかどうか、を諸事実に照らして確かめること、すなわち、「論理の糸」を求める仕事をするこ

³ 本稿は、社会情報研究資料センターが主催したシンポジウム「研究者資料のアーカイブズ—知の遺産 その継承に向けて—」(2011 年 11 月 26 日)における拙発表の予稿(栃内文彦:「近現代の科学史研究における資料のアーカイブ化の意義—坪井誠太郎資料調査から得られた知見より—」,『同シンポジウム予稿集』, 2011, pp. 6-9)を改め、補いを加えたものである。

⁴ 以下、2.1 および 2.2 節の内容に関する詳細は、例えば、栃内文彦、杉山滋郎:「『新しい岩石学』の第二次大戦前の日本岩石学界への導入過程—坪井誠太郎による Bowen 火成岩成因論研究」,『科学史研究』第 40 巻 (No.220), 2001, pp. 205-214 を参照。

⁵ 実験岩石学では、物理学(結晶光学など)や化学(相律の考え方など)を理論的背景に溶融実験や高圧実験を行う。これは、当時の彼らの目には、伝統的な地質学の手法(顕微鏡観察や野外調査などの記載的手法)と比べて極めて斬新に映った。

⁶ 大湯正雄:「岩石化学成分図示法に就て」,『現代之科学』1 (12), 1913, pp. 861-868 など。大湯 (1881-1921) は、旧制二高以来の神津の友人であり、共に東北帝大地質学教室を率いていた。

⁷ 神津が東京帝大地質学教室出身ということもあり (1905 年卒。なお、当時はほぼ全ての地質学研究者が東京帝大地質学教室を出ている)、両大学の地質学教室間には活発な交流があった。その交流は、誠太郎が東京帝大の地質学教室を継いでからも続いていた。

⁸ 1921 年(助教授となった年)から 1923 年まで。米国ではカーネギー研究所地球物理学実験所を訪れ、Bowen らに会って親交を深めた他、英国ではケンブリッジ大学鉱物学教室に滞在して、斜長石の化学成分を偏光顕微鏡による屈折率測定から決定する手法(「分散法」という)の研究を行っている。

⁹ 坪井誠太郎:『火成岩成因論』(岩波講座地質学及び古生物学・鉱物学及び岩石学), 岩波書店, 1932, p.128.

¹⁰ 紙幅の制限により解説は省略するが、「論理の糸」の考え方は、新事実の発見に合わせて理論の ad-hoc につつま合わせを行うということではない。誠太郎は戦後間もなく発表した小論(坪井誠太郎:「自然科学と自然科学者」,『科学圏』1947 (2), 青山書院, pp. 2-6)で、光学における基礎仮定(ニュートンによる「光は光素からなる」やホイヘンスの「光はエーテルの横波である」)を例に、「仮定と事実とを結ぶ連鎖」という言い方で、自らの考え方を説明している。

ある。その結果、Bowen の理論体系の基礎仮定と矛盾する事実が見つかったならば、基礎仮定を改めるか、新しい学説を求めなければならない¹⁰。

こうして Bowen の理論と光学分析法を用いた研究、「論理の糸」を求める仕事、を組み合わせ、誠太郎の火成岩成因研究は続けられた。そのいわば集大成が、1932 年に発表された『火成岩成因論』である¹¹。誠太郎が「新しい岩石学」である Bowen の理論に魅力されたように、誠太郎の火成岩成因論もまた、当時の日本地質学界において斬新なものと受け止められ、多くの特に若手の研究者らを惹きつけた。第二次世界大戦後の日本地質学界を主導したのは、誠太郎に直接・間接に学び、影響されたそのような研究者たちだった。

2.2 坪井誠太郎が日本地質学界に及ぼした影響

前節で述べた通り、誠太郎の火成岩成因論は多数の研究者を惹きつけ、概ね好意的に評価された。しかし、当時の日本岩石学界全体を見渡せば、主流は記載的手法を用いた研究であり、誠太郎らの「新しい岩石学」は不可欠の研究手法ではなかった。そのため、それに積極的関心を寄せる研究者は、実は多くなかった¹²。



図2 目白台キャンパス西2号館（撮影：柊内文彦）

¹¹ op. cit. (n. 8)。なお、誠太郎は1931年に『火成岩成因論』と同じシリーズで光学分析法に関する著作を出版している（坪井誠太郎：『鉱物及び岩石の光学的鏡検法』（岩波講座地質学及び古生物学・鉱物学及び岩石学），岩波書店，1931）。

¹² 本節の内容に関する詳細は、戦前については、例えば、柊内文彦、杉山滋郎：op. cit. (n. 4) を参照。戦後については、Tochinai Fumihiko A Study of the Japanese Geological Community in 1950~60s...Influence of Three Factors on the Controversies on Physicochemical Approaches..., 北海道大学大学院理学研究科物理学専攻提出博士論文，2005 などを参照。

一方、それに関心を寄せる若手研究者の中には、特に誠太郎の「論理の糸」のような研究哲学に違和感を覚える人たちもいた。誠太郎の論理的厳密さを求めるという姿勢が理解されず、それゆえ、「形式的である」と思われたことによる。しかし、戦前においては学界の封建性ゆえ、公然とした批判が行われることはなく、仲間内の勉強会などの集まりの中にとどまった。

戦後になると、誠太郎たちからその下の世代への、研究者の世代交替の時期と重なったことも後押しとなり、地質学界においても「学界民主化」の動きが強まる。その流れの中で、誠太郎は、「戦前の（悪しき）封建的研究体制の象徴」として、彼が1954年に停年により研究の第一線を退くまで、「攻撃」の対象となった。

その「攻撃」を主に行ったのは、地学団体研究会（地団研）を主導する研究者たちであり、「攻撃」したのが、誠太郎の「研究哲学」だった。その理由は主に二つある¹³。

第一に、1947年に設立された地団研は、学界の民主化を謳い多くの若手研究者を集めつつあったが、その動きの中で、誠太郎が民主化を阻む旧体制の総本山とされたことである。地団研の設立者で、カリスマ的影響力を持っていた井尻正二（1913-99. 古生物学者）は「誠太郎は Bowen の理論を絶対化し、全ての火成岩の成因に（事実の方を理論に合わせることで）当てはめようとしている。それは自



図3 段ボール箱に収められた資料。
西2号館2階の201室と207室に保管されている（撮影：柊内文彦）

¹³ 本稿では詳細を論じないが、これらの理由の社会的背景として（三つ目の理由として）、1950-60年代の地質学者の間に見られた左翼的な思想への共感・共鳴がある。なお、当時は、地質学界に限らず、同様の運動が活発に行われていた。それらについては、広重徹：『戦後日本の科学運動』，中央公論社，1960が詳しい（特に第5章）。

然の事実を無視した形式論理学にほかならない」と批判した¹⁴。自然の事実こそ重視しなければならない地質学者が、それを無視しており、しかも、その考え方を周囲の研究者らに押し付けている、というわけである。

第二の理由は、高額な設備と物理学や化学の高度な知識を要する物理学・化学的な手法や理論に批判的であることが、地団研が多くを会員を集める上で都合が良かったことである。地団研は、地質学では研究対象（岩石、地層、化石など）の「歴史性」の把握を重視した研究手法を取るべきである、そして、「歴史性」は、各地の様々な地質現象を丹念に調べることによってこそつかみ取ることができる、と主張した。そのような調査・研究は、研究費用が乏しくても進められるし、地質学に関わっているが研究を専門とはしていない人々（地学教師、アマチュアの地質愛好家など）も関わるができる。そればかりか、丹念に調べれば調べるほど「歴史性」がより明確につかみ取れるわけだから、地質学に本質的な貢献をすることができる。実際、1947年に130名余りで設立された地団研の会員数は1965年頃にはおよそ1500名に達したが、常に、会員の過半数が学生や地学教師らだった¹⁵。

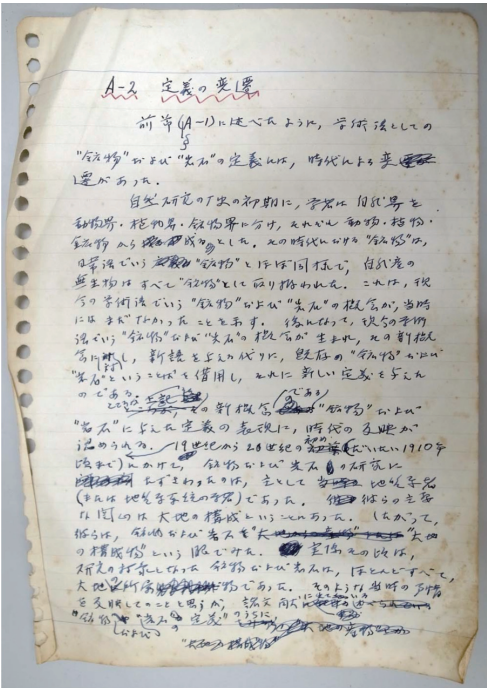


図4 断片的に残されている研究ノート。
この例のような定義に関する記述が多く見られる。(資料複写：柄内文彦)

¹⁴ 井尻正二：『地質学の根本問題』、地学団体研究会、1958（初版1952）、pp. 46-47。

3. 坪井誠太郎資料調査

3.1 誠太郎資料およびこれまでの調査の概要

誠太郎資料収集の経緯は「はじめに」で述べた通りである。センターに地質学史研究者がいないため、筆者が同資料に接する機会を得た2010年中ごろの時点では、日付や資料タイトルなどがデータベース化されて本郷キャンパスに保管されていたのは誠太郎資料の一部だけで（それでも相当量になるが）、資料の大半は段ボール箱約250箱に収められ、目白台キャンパス西2号館に置かれていた（図2、3）。その内の50箱について11年中ごろまでの約1年をかけて概要調査を実施した結果、坪井に関する従来の知見を裏付ける資料の他、研究ノートや写真などの資料が含まれており、資料としての価値が高い、と判断した。2012年4月以降も概要調査を進めており、12年度末までに、さら

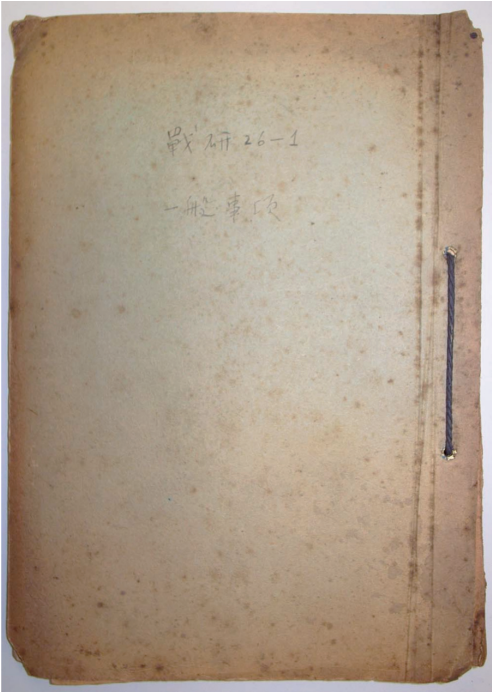


図5 「戦研26-1 一般事項」と書かれたノート。
(資料複写：柄内文彦)

¹⁵ 地団研の会員数は、地団研：『科学運動』、築地書館、1969（初版1966）の各所から採っている。この1500名という会員数は、規模の上では、地質学関係の他の学会と肩を並べる、あるいは上回る人数である。参考まで、日本地質学会の会員数は2159名（『地質学雑誌』71, 1965, p. 317）、日本岩石鉱物鉱床学会は999名（『岩石鉱物鉱床学会誌』53, 1965, p. 111）、日本鉱物学会は667名（『鉱物学雑誌』7, 1965, pp. 155-183から筆者が集計）である。なお、地団研の活動の評価については、例えば、中山茂：「井尻正二論」、『思想の科学』50号、1966, pp. 100-106などを参照（アマチュア層を取り込む努力については、高く評価している）。

に約 150 箱について概要調査を行う予定である（残り 100 箱弱）。

3.2 誠太郎資料の調査から得られた知見

誠太郎資料の調査は、まだ、概略を把握する段階であり、「これまでの定説を覆す資料が見つかった」ということとはない。

しかし、これまでの概要調査からは（劇的な発見はないとはいえ）幾つかの興味深い知見が得られている。

1) 2.1 節および 2.2 節で述べたことを裏付けたり支持したりする資料が得られた。

例えば、留学中に撮られた写真の中に Bowen らと一緒に写っている数枚からは誠太郎が Bowen の下での滞在を極めて楽しんでいることが窺える。断片的にノートに残された原稿からは、誠太郎が論理的厳密さを強く求めていることが示唆される（図 4）。また、誠太郎が晩年になっても光学分析に興味を持ち続けていたことを裏付ける資料もある。

2) 誠太郎が東大地質学教室を停年で退いた 1954 年以降も、地質学界に相当な影響を及ぼしていたことを示唆する資料が得られた。

地団研のニューズレターの分析からは、彼の影響力は停年を機に急速に減少したことが窺える。しかし、誠太郎資料に含まれている、彼の著作の出版社との手紙のやり取りによると、1970 年代になってから、誠太郎の著作からの無断引用が、筆者の把握する限り 2 回行われている。

3) 第二次大戦中および終戦後の GHQ 時代に行われた研究の書類などが見つかった。

内容の調査は今後の課題であるが、誠太郎とその周囲の研究者らの戦中から終戦後間もなくにかけての様子を把握するための有益な資料となるのではないだろうか（図 5）。

この他にも誠太郎資料には、彼の尋常小学校から旧制一高までの各種証書・賞状、東京帝大卒業後の各種辞令など、誠太郎の人となりを考察する手がかりとなりうる資料も含まれており、興味深い。

4. おわりに：今後の展望

以上、筆者がこれまでに坪井誠太郎に関して行ってきた科学史研究の内容の概略を述べつつ、坪井誠太郎資料の概要調査から得られた知見を紹介した。

筆者は、現在勤務校において、技術者倫理教育に関わっている。「科学技術創造立国」を標榜する日本は、いわば、国の将来を科学技術に託しているといえよう。科学者・技術者は、現在の社会を支えるだけでなく、未来の日本に生きる人々の暮らしをも支える責任を負う、ということである。したがって、「はじめに」で述べた「科学技術の営みの健全性を評価する」ことは今後ますます重要になるし、健全性を保つ上で科学技術倫理教育は必須である。そして、それらはいずれも歴史的視点を必要としており、特に近現代の科学史研究には、それに貢献することが期待されていよう。

ところが、冒頭に述べたように、近現代の科学史資料の収集・調査には独特の困難がある。誠太郎資料に関わるようになって、先ず頭に浮かんだことは、「誠太郎に関わる研究を始めた当時、誠太郎資料がすでに収集されていて、利用することができていたら」という思いだった。資料収集に「宝探し」的な側面があるのは当然だし、「宝」を見つける目を持っていること、あるいは、その目を養うことは、研究者に求められる重要な能力だろう。しかし、研究する年代が現代に近づけば近づくほど、この「宝探し」における「運」の割合が大きくなるように思われる。筆者は幸運にも、研究初期に出会った地質学者を起点に芋づる式に資料を収集することができた。しかし、情報技術が今後更に進むにつれ、これまでとは比較にならない膨大な量のデータが（しかも紙以外の媒体で）、発生する。「芋づる式」では対処できまい。

ところで、現在進めている誠太郎資料の概略調査から得られつつある知見は、第 3 節で見たように、筆者がこれまで行ってきた地質学史研究の結果を裏付けるものである。このことは、誠太郎資料のような資料がどこかに残されていれば、そしてそれがアーカイブ化され公開されれば、それを「芋づる」の起点とすることで、より確実性を高めた資料収集・調査が可能となる見込みが大きいことを示唆している。

幸い、筆者は、科学史研究に資するアーカイブの構築を目指した研究を、2012-14 年度にかけて科研費を得て実施することとなった。現在実施している誠太郎資料の概要

調査もその一環として行っている¹⁶。

今後は、13年度中に誠太郎資料の概要調査を終え、特に価値のある資料の抽出に着手する予定である。具体的には、手紙や研究ノート of 文面などを質的に分析し、関連付けやキーワード設定などを行い、そうしたメタ情報を含めたデータベースを構築する。併せて、筆者がこれまでに収集した誠太郎に関わる資料もデータベースに追加する。追加する資料にはインタビュー記録（音声・それを文章化したもの）、学会のニュースレター（マイクロフィルムをTIFF形式で画像化したもの）などが含まれている。

筆者が把握する限り、地質学史関連では、地質学者の故今井功が遺した大量の資料が散逸することなく保管されて

いる他、名古屋大学の地球科学関連資料もまとめて保存されているようである。上述の誠太郎資料のアーカイブ化が順調に進めば、地質学史資料のアーカイブ化の一つの方法論が示されたことになる。ゆくゆくは、それをこれらの資料に適用し、質の高い地質学史資料のアーカイブへと発展させることができれば、と考えている。

最後に、このような研究の機会を筆者に与えてくださり、さらに、様々な便宜を図ってくださった、研谷紀夫氏、玉井建也氏、福重旨乃氏、山本博文 社会情報研究資料センター長にあつくお礼申し上げますとともに、これからもよろしくご指導くださいますよう、お願い申し上げます。
(柄内文彦・情報学環客員研究員、金沢工業大学基礎教育部)

¹⁶ 脚注2を参照。なお、研究課題名は「近現代科学史資料のアーカイブ化に関する研究—坪井誠太郎地質学史資料の分析から—」，研究代表者は筆者で、玉井建也氏と研谷紀夫氏のお二人にも，連携研究者として参加頂いている。

坪井信道・信良関係資料 および小野秀雄関係資料目録補遺

玉井建也

本稿は2012年3月に発刊された『坪井家関係資料目録』および『小野秀雄関係資料目録』の補遺にあたる。それぞれの資料群に関しては各目録に収録されている論考および資料群情報に詳細に記載されているので、そちらを参照されたい。

坪井信道・信良関係資料について簡単に説明をすると、信道(1795-1848)は正五郎の祖父にあたり、蘭学を学んだ後、長州藩の藩医として活動している。その息子であり、正五郎の父である信良(1823-1904)は江戸幕府の奥医師として活動した後、明治時代には東京府病院長として活動した。今回掲載する目録は、外科関係の書物など医学書を多く含み、彼らの活動の一端を知る貴重な資料である。

小野秀雄(1885-1977)は日本の新聞学の祖ともいうべき人物であり、戦前より東京帝国大学文学部新聞研究室で活動をし、情報学環の前身である新聞研究所の初代所長、日本マス・コミュニケーション学会の前身である日本新聞学会の初代所長として活動し、かわら版・錦絵の収集家としても著名な人物である。今回の目録では、彼自身の多彩な収集活動を表しているように新聞やかわら版が多く含まれている。

本目録の凡例は既に公開している各目録の凡例に依拠しているが、詳細は以下の通りである。

● 坪井家関係資料目録 凡例

1. 坪井家関係資料目録は、坪井家から寄贈された文書等に関する目録である。
2. 目録の整理番号については、坪井家より寄贈された際、順に番号を割り振り、さらに資料によって枝番号を付与した。一部の資料群に関しては坪井正五郎とは関係のない資料であったことにより、本目録には収録していない。そのため一部の資料に関しては番号順には掲載されていない。
3. コンテンツ内容については、論文、エッセイ、メモ、手紙、講義録、写真、日記・日誌、証書、絵画・図案などに分類し、当てはまらないものについてはその他と表記した。

4. 手紙に関しては「作成・編集者/出版・発行者」に送り手を、「受け手」に宛所にある人名を表記した。それ以外の雑誌等については資料に表記されている書き手・出版社などを「作成・編集者/出版・発行者」に表記した。
5. 年号に関しては全て西暦で表記し、分かるものに関しては月日も記載した。また、寸法に関しては、全ての単位はmmである。

● 小野秀雄研究資料目録 凡例

1. 小野秀雄研究資料目録は、小野家から寄贈された文書のうち研究資料に関する目録である。なお、かわら版・新聞錦絵に関しては既に整理がされており、別途、目録が公開されている(木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京大学総合研究博物館、1999年)。
2. 目録の整理番号については、小野家より寄贈された際、東京大学大学院情報学環図書室にて順に英字を割り振り、さらに資料によって枝番号を付与した。
3. コンテンツ内容については、論文、エッセイ、メモ、手紙、講義録、写真、日記・日誌、証書、絵画・図案などに分類し、当てはまらないものについてはその他と表記した。
4. 手紙に関しては「作成・編集者/出版・発行者」に送り手を、「タイトル」に宛所にある人名を表記した。それ以外の雑誌等については資料に表記されている書き手・出版社などを「作成・編集者/出版・発行者」に表記した。
5. 年号に関しては全て西暦で表記し、分かるものに関しては月日も記載した。また、寸法に関しては、全ての単位はmmである。

なお、両資料目録ともに社会情報研究資料センター Digital Cultural Heritage (<http://crarc.iii.u-tokyo.ac.jp/web/>)にて詳細なメタデータとともに公開されている。

坪井信道・信良関係資料

箱	山	体	細	枝	コンテンツ内容	タイトル	クリエイター	西暦	月	日	量	縦	横	高
6	3	11			和装本	日本志第五之五					1	165	146	8
6	3	12	1		和装本	日本志第五卷第一篇					1	163	148	3
6	3	12	2		和装本	日本志五之二					1	162	142	2
6	3	12	3		和装本	日本志五之三					1	162	144	2
6	3	12	4		和装本	日本志卷五之四					1	160	144	3
6	3	13			和装本	日本志五之九					1	162	145	7
6	3	14			和装本	日本志五之十二					1	158	143	7
6	3	15			和装本	日本志第四卷ノ一					1	162	143	12
6	3	16			和装本	長崎ヨリ小倉ニ至ル旅路					1	160	143	1
6	3	17			和装本	故聞あらきし由なものに					2	247	173	1
6	3	18			和装本	泊沼舎口集 卷之一					1	243	172	9
6	3	19	1		和装本	目録					1	440	570	
6	3	19	2		手紙	感謝状	二條基弘、徳川頼倫、 徳川達孝、蜂須賀正韶、 浅野長之	1905	3		1	196	934	
6	3	20			和装本	きりつほ					1	243	171	6
6	3	21			和装本	[五言絶句集]					1	246	167	7
6	3	22			和装本	行路鶯					1	242	170	1
6	3	23			和装本	こに入たる由を遠国につけて人のもとへ					1	249	172	1
6	3	24			印刷刊本	内田嘉一訓点 西薬略釈		1871			1	237	136	17
6	3	25			和装本	以太利裁稲法 卷之三止					1	240	161	11
6	3	26			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十二					1	243	167	11
6	3	27			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十三					1	243	167	13
6	3	28			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十四					1	243	167	11
6	3	29			和装本	呉魯斯氏外科書 三輯 一					1	229	159	12
6	3	30			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十一					1	245	167	14
6	3	31			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十					1	245	166	12
6	3	32			和装本	暹羅誌料 全					1	232	158	10
6	3	33			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 卷之二十					1	243	167	10
6	3	34			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十九					1	243	167	11
6	3	35			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 十八					1	243	166	10
6	3	36			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 三					1	243	167	7
6	3	37			和装本	寒暖計					1	245	165	13
6	3	38			和装本	獣医読本	坪井信良	1876	12		1	236	160	16
6	3	39			和装本	米国衛生叢書 海気及海水浴論					1	232	157	12
6	3	40			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 二十一					1	243	162	10
6	3	41			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 二十二 止					1	245	166	11
6	3	42			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 九					1	243	167	13
6	3	43			和装本	呉魯斯氏外科書初輯 二					1	243	166	8
6	3	44			和装本	[] トロムボイシング水政学 下巻 三編 三 水門					1	243	162	12
6	3	45			和装本	抄訳雑集 一					1	242	162	15

小野秀雄関係資料目録

箱	山	体	細	枝	コンテンツ内容	タイトル	クリエイター	西暦	月	日	量	縦	横	高
G	7	22			新聞	開化新聞	箕輪勝／三益社	1883			1	228	155	
G	7	23	0			封筒	日立製作所				1	322	228	
G	7	23	1		その他	現代新聞批判 17号	太田梶太／現代新聞批判社	1934	7	15	1	396	276	
G	7	23	2		その他	現代新聞批判 18号	太田梶太／現代新聞批判社		8	1	1	396	276	
G	7	23	3		その他	現代新聞批判 20号	太田梶太／現代新聞批判社		9	1	1	396	276	

G	7	23	4		その他	現代新聞批判 21号	太田梶太／現代新聞批判社		9	15	1	396	276	
G	7	23	5		その他	現代新聞批判 24号	太田梶太／現代新聞批判社		11	1	1	396	276	
G	7	24			雑誌	写真週報 171号	情報局／内閣印刷局	1941	4	6	1	294	210	
G	7	25			雑誌	新聞学研究 5号	小野秀雄／新聞学研究会	1926	12	27	1	221	154	
G	7	26			その他	印刷文化展覧会歴史的列品目録	池田敬八／印刷文化展覧会協賛会	1921	10	17	1	221	152	
G	7	27	0		その他	包装用紙					1	340	247	
G	7	27	1		その他	[ビラ] 新聞配達夫救護 大演説会		1919	11		1	129	192	
G	7	27	2		その他	[ビラ] 敢えて江湖士人に訴ふ(新聞従事員共励)	新聞従事員共励会	1919	11		1	186	432	
G	7	27	3		その他	新聞印刷職工罷業の経過と新聞社の態度	横山勝太郎				1	255	184	
G	7	27	4		その他	[ビラ] 御願い(新聞公正取引)	東京都新聞販売同業組合・東京地区新聞公正取引協議会	1959	1		1	180	251	
G	7	27	5		その他	[ビラ] 御願い(新聞公正取引)	東京都新聞販売同業組合・東京地区新聞公正取引協議会	1959	1		1	178	256	
G	7	28			その他	おとしだま					10	157	202	
G	7	29	1		封筒	封筒					1	295	197	
G	7	29	2		原稿	メモ書き					1	255	181	
G	7	29	3		その他	かわら版					27	227	331	
G	7	30			その他	英米スクール・オブ・ジャーナリズム	小野秀雄				1	255	175	
G	7	31	1		写真	(台紙に張られた) NOVELLES ORDINAIRES DE					1	313	467	
G	7	31	2		写真	福地源一郎					1	296	230	
G	7	31	3		写真	GAZETTE					1	202	140	
G	7	31	4		その他	「海町痛」などが印字された紙					1	189	238	
G	7	31	5		その他	「諸自弱」などが印字された紙					1	186	233	
G	7	31	6		その他	「渡駅」などが印字された紙					1	225	149	
G	7	31	7		その他	「死医愁」などが印字された紙					1	188	241	
G	7	31	8		その他	(台紙に貼られた)「大芝蔴」などが印字された紙					1	200	258	
G	7	32	0		包紙	台紙					1	304	454	
G	7	32	1		新聞	東京日々新聞 明治7年6月10日	甫喜山景雄／日報社	1874	6	10	1	272	418	
G	7	33			その他	(台紙に貼られた)[ビラ] 対「時事新報」の関係の明にして公正なる輿論に訴ふ 非買の責は彼らにあり	一府一道一七県新聞売捌業者定価売即行会	1926	4		1	324	468	
G	7	34			その他	(台紙に貼られた)[ビラ]「新聞記事差止事項に関する件」と「禁止事項(二七)」	警視庁検閲係				1	468	316	
G	7	35			その他	(台紙に貼られた)[ビラ]禁止事項(七)	警視庁検閲係	1919			1	467	314	
G	7	36			写真	東京日々新聞 736号 (岸田吟香)	東京日々新聞				1	450	310	
G	7	37	1		写真	ジョン・レッドィ・ブラック氏					1	260	175	
G	7	37	2		新聞	中外新聞 慶応4年3月28日		1868	3	28	1	225	155	
G	7	38			新聞	(プラスチックに挟まれた) 近江新報号外 明治24年5月27日 (1)		1891	5	27	1	336	495	
G	7	39			新聞	(プラスチックに挟まれた) 近江新報号外 明治24年5月27日 (2)		1891	5	27	1	248	334	
G	7	40			写真	萬朝報 明治35年10月31日		1902	10	31	1	310	444	
G	7	41			写真	(台紙に貼られた) MULEY ISMAEL					1	250	252	
G	7	42			写真	読売新聞 大正15年9月27日 (判読困難)		1926	9	27	1	296	232	
G	7	43			写真	文学博士の甥、華厳滝に投ず					1	280	229	
G	7	44			写真	東京日日新聞 明治22年2月12日		1889	2	12	1	282	232	
G	7	45			新聞	京都日出新聞 昭和4年10月9日	横田秀三／京都日出新聞社	1929	10	9	1	544	406	
G	7	46			その他	肖像画のプリント					1	329	242	

G	7	47		写真	日本 明治 28 年 5 月 15 日		1895	5	15	1	229	297	
G	7	48		写真	関東大震災の惨状					1	236	295	
G	7	49		写真	絢爛強力な原敬内閣の顔触れ					1	294	244	
G	7	50		写真	読賣新聞 昭和 6 年 5 月 20 日		1931	5	20	1	228	294	
G	7	51		写真	東京朝日新聞 昭和 6 年 11 月 27 日		1931	11	27	1	310	228	
G	7	52		写真	神風号					1	227	295	
G	7	53		写真	関東大震災の惨状					1	223	292	
G	7	54		写真	公論新報・日本・時事新報					1	444	307	
G	7	55		写真	東京日日新聞・日新真事誌・横浜毎日新聞					1	455	316	
G	7	56		写真	明治日報・自由新聞など					1	440	308	
G	7	57		写真	日本 明治 28 年 5 月 27 日		1895	5	27	1	452	310	
G	7	58		写真	東京日々新聞社屋					1	212	294	
G	7	59		写真	遼東半島還付の号外		1895	5	14	1	223	295	
G	7	60		写真	和服の男性の写真					1	242	295	
G	7	61		写真	其借財の返済の法は如何					1	221	294	
G	7	62		写真	建物の写真					1	217	292	
G	7	63		写真	飛行機の写真					1	296	244	
G	7	64		写真	東京日日新聞 明治 45 年 7 月 30 日		1912	7	30	1	280	233	
G	7	65		写真	鹿鳴館夜会・顯官婦京・陸軍・海軍					1	230	280	
G	7	66		写真	日比谷の国民大会		1905	9	6	1	232	295	
G	7	67		写真	男性の写真					1	248	302	
G	7	68		写真	村山隆平					1	237	268	
G	7	69		写真	郵便報知新聞 425 号					1	451	309	
G	7	70		写真	男性の写真					1	232	291	
G	7	71		写真	よみうりラヂオ版 大正 14 年 11 月 24 日		1925	11	24	1	204	293	
G	7	72		写真	和服の男性の写真					1	242	296	
G	7	73		写真	外務省焼打事件					1	227	294	
G	7	74		写真	横浜新報・江湖新聞・中外新聞・万国新聞紙					1	221	295	
G	7	75		写真	東京日々新聞 1512 号					1	442	303	
G	7	76		写真	郵便報知新聞 1 号・82 号					1	447	302	
G	7	77		写真	読売新聞 昭和 6 年 11 月 8 日		1931	11	8	1	227	295	
G	7	78		写真	大隈重信					1	247	292	
G	7	79		写真	和服の男性の写真					1	238	300	
G	7	80		写真	大阪毎日新聞 号外 明治 37 年 10 月 12 日		1904	10	12	1	240	293	
G	7	81		写真	満都混乱					1	229	297	
G	7	82		写真	スーツの男性の写真					1	280	220	
G	7	83		写真	板垣退助の写真					1	242	300	
G	7	84		写真	和服の男性の写真					1	242	286	
G	7	85		写真	男性の写真					1	240	297	
G	7	86		写真	言論取締諷刺刺画					1	297	252	
G	7	87		写真	言論取締諷刺刺画					1	237	298	
G	7	88		写真	新聞の雑録					1	228	280	
G	7	89		写真	THE SUN・WEEKLY NVVES from Italy など					1	218	272	
G	7	90		写真	ボー輪転機					1	243	293	
G	7	91		写真	二・二六 反乱軍朝日に乱入して活字をくつがえす					1	293	227	
G	7	92		写真	東京日日新聞 明治 45 年 7 月 29 日		1912	7	29	1	279	232	
G	7	93		写真	(プラスチックに挟まれた) 東京日日新聞 号外 大正 12 年 9 月 1 日	東京日日新聞発行所				1	254	292	
G	7	94		写真	第一次欧州大戦後輸入した朝日の輪転機					1	227	290	
G	7	95		写真	新聞紙条例ヲ論ズ					1	310	449	
G	7	96		写真	パイロットの写真					1	227	292	

G	7	97			写真	日比谷の人波・新聞社焼打ち					1	308	445	
G	7	98			写真	萬朝報 大正2年1月22日		1913	1	22	1	306	443	
G	7	99			新聞	読売新聞 昭和13年10月13日(夕刊)	読売新聞社	1938	10	13	1	543	400	
G	7	100			新聞	京都日出新聞 昭和4年10月9日	京都日出新聞社	1929	10	9	1	543	407	
G	7	101			新聞	毎日新聞 昭和19年3月11日	毎日新聞社	1944	3	11	1	404	273	
G	7	102			新聞	大阪新聞 昭和19年7月2日	大阪新聞社	1944	7	2	1	543	409	
G	7	103			新聞	報知新聞 昭和17年4月14日	報知新聞社	1942	4	14	1	54.2	40.3	
G	7	104			その他	黒の厚紙					1	31.5	46.8	
G	7	105			その他	黒の厚紙					1	31.5	46.8	
G	7	106			その他	黒の厚紙					1	31.5	46.8	
G	7	107			その他	黒の厚紙					1	31.5	46.8	
G	7	108	0		その他	茶色の厚紙					1	49.3	70	
G	7	108	1		新聞	東京大学新聞 昭和23年12月27日	東京大学新聞社	1948	12	27	1	55.8	40.7	
G	7	108	2		新聞	新大阪 昭和30年9月20日	新大阪新聞社	1955	9	20	1	54.2	41	
G	7	108	3		新聞	東北大学新聞 昭和30年9月5日		1955	9	5	1	45.5	40.7	
G	7	108	4		新聞	自由人 昭和29年6月15日	自由人クラブ	1954	6	15	1	54.3	39.8	
G	7	108	5		新聞	時事新報 昭和22年10月10日	時事新報社	1947	10	10	1	54.3	39.2	
G	7	108	6		新聞	信陽新聞 昭和21年8月12日	信陽新聞社	1946	8	12	1	38.2	27.3	
G	7	108	7		新聞	日本読書新聞 昭和17年3月2日	日本文化出版文化協会	1942	3	2	1	54.5	40.8	
G	7	108	8		新聞	三田新聞 昭和17年3月25日	三田新聞学会	1942	3	25	1	55.1	39.5	
G	7	108	9		雑誌	ジュニアジャーナリスト 昭和14年1月1日	上智大学新聞学科同窓 校友会	1939	1	1	1	39.5	27.3	

新聞縮刷版・製本原紙の黴拭き取り作業報告

飯野 洋一

1. はじめに

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター（以下、社会情報研究資料センター）は、旧新聞研究所時代から国内・国外の新聞資料の収集に努め、多くの研究者の利用に供している。

その所蔵資料は、膨大な量の新聞原紙のみならず、製本原紙約 20,000 冊、新聞縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールである。

新聞縮刷版・製本原紙は、社会情報研究資料センター地下書庫（以下、地下書庫）と新館M3階、3階、M4階に収蔵されているが、書庫の保存環境が十分に整備されておらず、長年に亘り資料劣化対策を講じてこなかった。

このため、新聞縮刷版・製本原紙に大量の黴が発生し、資料保存と人体への影響の面で危機的状況となり、資料劣化対策として、黴の除去が喫緊の課題となった。

今回は特に緊急性が高い、地下書庫フロア2、フロア3に収蔵されている新聞縮刷版・製本原紙を対象に黴の拭き取り作業を行なった。

本稿はその作業報告である。

一. 地下書庫の構造と収蔵資料

新聞縮刷版・製本原紙が収蔵されている地下書庫は、情報学環本館の地下1階にある。地下1階の東側はドライエリア、西側は地下通路が設けられ、地下書庫の窓は直接屋外に通じている。

図1は、地下書庫の平面図である。フロア1、フロア4には空調機、フロア1～5には除湿機が1台ずつ設置さ

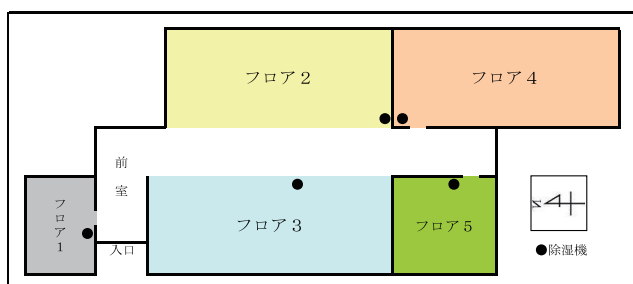


図1 地下書庫平面図

れ、常時稼動している。フロア1、フロア4、フロア5は個室であるが、前室、フロア2、フロア3は同一空間にある。

前室に製本原紙約 460 冊、フロア1に新聞縮刷版約 2,700 冊、フロア2に製本原紙約 800 冊、新聞原紙、フロア3に新聞縮刷版約 4,500 冊、新聞原紙、フロア4に製本原紙約 1,800 冊、フロア5に新聞原紙が収蔵されている。

二. 作業概要

今回の黴拭き取り作業の対象資料は、地下書庫フロア2の製本原紙約 800 冊とフロア3の新聞縮刷版約 4,500 冊である。

黴の拭き取りのみならず、資料が配架されている書架の棚板にもクリーニングを施した。(株)日本ファイリングに委託し、専門作業員が作業を行なった。

作業期間は、平成24年5月28日～6月11日の平日11日間で、作業人員は1日当たり3～5人、延べ36人である。

作業場所は地下通路である。地下書庫入口を出て、正面の地下通路を開け、スロープを下ると、地下通路に出る。上部は屋根で覆われているため、降雨の時には作業が可能である。

使用薬剤は、消毒液エタノール液（エタノール（C₂H₆O）、76.9～81.4VOL%で、拭き取りはエリエールアルコールタオルで行なった。

作業手順は、以下のとおりである。

- 1) 対象資料を三段式ブックトラックに載せて、地下書庫から地下通路に搬出する。
- 2) HEPA フィルター付き掃除機で黴を吸い込む。
- 3) エタノールで表装部分全てを拭き取り、乾燥させる。
- 4) 書架の棚板を漂白剤（2%程度に希釈）で水拭き後、から拭きし、エタノールで拭き取り乾燥させる。
- 5) 黴拭き取り終了後の資料を三段式ブックトラックに載せて、地下書庫に戻し、再配架する。

三. 作業風景

図2は、黴拭き取り前の書架の全景である。



図2

図3は、黴の被害状況である。



図3

図4は、掃除機による黴吸い込み光景である。



図4

図5は、エタノールによる黴拭き取り光景である。



図5

図6は、書架の棚板のクリーニング光景である。



図6

図7は、黴拭き取り終了後の資料である。



図7

おわりに

今回の作業により、地下書庫フロア2の製本原紙約800冊とフロア3の新聞縮刷版約4,500冊に発生した黴が除去された。

だが、資料劣化対策はようやくにして、その緒についたばかりである。依然として、地下書庫前室の製本原紙約460冊、フロア1の新聞縮刷版約2,700冊、フロア4の製本原紙約1,800冊と新館M3階の製本原紙約400冊には黴が発生し続けている。

資料保存と人体への影響を考えると、早急に黴の拭き取り作業を行なっていく必要がある。

追記

今回の新聞縮刷版・製本原紙の黴拭き取り作業は、田嶋記念大学図書館振興財団助成金と社会情報研究資料センターの資料劣化対策費により実施した。

実施に当たり、東京大学経済学部資料室の小島浩之講師、矢野正隆特任助教、(株)日本ファイリングの須藤猛彦部長（資料保存統括）から貴重な助言と指導を賜わった。記して御礼を申し上げる。

（飯野 洋一 情報学環・学際情報学府図書係長）

セ ン タ ー 情 報

■社会情報研究資料センター長

平成 24 年度 史料編纂所・情報学環学際情報学府 山 本 博 文

■社会情報研究資料センター運営委員会委員

平成 24 年度の委員の方々です。

馬 場 章 (委員長 情報学環学際情報学府)

山 本 博 文 (史料編纂所・情報学環学際情報学府)

石 崎 雅 人 (情報学環学際情報学府)

金 森 修 (教育学部・情報学環学際情報学府)

田 中 秀 幸 (情報学環学際情報学府)

丹 羽 美 之 (情報学環学際情報学府)

中 野 公 彦 (生産技術研究所・情報学環学際情報学府)

成 原 慧 (情報学環学際情報学府)

■旧植民地系新聞のマイクロフィルム寄贈

マイクロフィルム『大連新聞』（日本語 1920 年 6 月～1932 年 1 月 60 本）と『泰東日報』（中国語 1911 年 2 月～1945 年 9 月 大連発行 120 本）が寄贈されました。

■空調機の新規設置

新館書庫 1 階のマイクロフィルム保存庫の空調機が故障し、修復は不可能であることが判明したため、新規に空調機を購入・設置し、マイクロフィルムの保存環境を整備しました。

■展示室の閲覧室（Collection Room）への改装

展示室を小野秀雄関係資料、坪井正五郎関係資料などの貴重資料を展示・閲覧する閲覧室（Collection Room）として改装しました（表紙写真を参照）。